



譚藝集

名人豊澤團平の談話

(一)

左 東 流 水 編

管に浪華の地とのみ云はず、所謂太極取つては天下當るべき敵なく宛然英嶽の萬山を俯瞰するが如く高く等輩の間に聳立するものは夫れ豊澤團平か、そもく同人が技藝に於ける尋常一流の學んで而して成るの類に非ざるはその二九の紅額たりし時かの義大夫以來の名晋家斯道の氏神と稱せられたる故長門大夫の撰む所となり、特に招かれて其技手たりしといふを見ても以て如何に天稟の逸品たりしかを知るに足るべし、今や古稀の高齡に加ふること尙二歳といへども斯道を研究すること瞬時も怠らず常にわが技に對する名晋家の敵手なきに苦しむ畢竟現時の大夫の如きは其誰彼を問はず所謂皓らして黃ふよりは寧ろ團平の口上云ひなるのみ加之も其談話の如き自然に哲學的の趣味を含み要するに斯道の福音デンく家の取て以て虎の巻に値すべきもの歟

下手の横好き年ばかり取りましてサツパリ増が明きません、ハイ今年七十二になりました、此七十餘年の間三昧線ではいろく苦しみまして今でも矢張り工風に怠らない積りですが俗藝といふものは底がな

く又至り難いものですな。私の家は今こそ此聲に藝人になつて居りますが播州加古郡で元は八幡太郎義家から血統を傳へた家です、大昔は加古の城主でございましたが、太閤様時代に彼の別所小三郎に滅されまして、民間に落ちましたが夫でも加古といふ苗字を名乗つて居た程でした、其城跡は矢張り一族の屋敷になつて居りました。まあ百姓になりましては豪農ですな、苗字帶刀御免の家柄でございまして淨光寺といふ菩提寺へ廿五石の御朱印を付た位でした、が有爲轉變の世の中その後城跡の屋敷を質入をするやらカラ仕方のない事になりましたが私の祖父といふのが中々活達な人で名高い藝人が皆出入をしました、相撲取でも大夫でも大抵來ましたよ、夫れで中々豪遊家でございまして大阪へ來ますとサア陀々羅遊をするのですな、其頃新町の九軒の堺井屋などへ遊びに行つた時は恰好夏でございまして砂糖水なんぞを一杯々々持て來ては間緩いといふので大八車で砂糖を持込ませ井戸の中に叩き込んださうでその當座は井戸が砂糖臭くつて呑めなかつたさうです、其様な遊びをした人でした、親者は又義大夫が道樂でまあ

田舎天狗ですな。私は小さい時から此の大阪へ養子によこされましたが、三味線を習はせられたのですな、けれども其頃は太極でした、家柄ですから和歌なんぞを習ひまして尤も養子先きといった所が親類中で故郷の實家から送る養ひ金で活計を立て居る家ですからその三味線を習った所が道楽半分ですな、處が其内にソレ一族が皆零落をしたものですから今度は眞誠に習はなければならぬ事になりました、其所で和歌の方なんぞは止めましたが、藝を以て身を立てる以上は日本に名の残る様なものにならなければいかんといふので氏神様へ誓を立て夫から本氣になつて三味線を稽古しましたが師匠は三代目豊澤廣助で一盤私に廣助になる譯ですが、其因縁は追々お断り申す事として、先づ習ひ初めを申し上げます、私にはこの三味線が性に合ふのですからもう十五の時には序の切を弾く様になりました、舊斯なるとサア面白くて堪りません、人が彼は云ふてくれすから勵みが付きまして寝ても覺めても三味線です、デ綱大夫が兵庫で己が弾かせるから前髪を落して元服しろと云ひましたが此方もナニ兵庫邊で弾かせられるのなら元服はしたくないなどといふ見識になりました、夫れからは春大夫名人でしたな、時大夫、梶大夫からなつた染大夫、又其前の染大夫からなつた越前の大様などは貴様には思惑があるからとて私に弾かしてくれました、夫から若大夫此の人は中々の名人で又六ヶ敷い三味線弾を泣せる人でしたが、何いふものか己は大夫をやめ様と思つたが圓平が弾くならば又遣らうと云つて語つてくれました、夫から長門大夫是が古今の名人で其人に弾かせられたのは私が十八の年でした。

長門大夫といふ人は播磨の大様の藝風を慕つた人で、私の申すまでもない太好のお方は御承知の筈で古今の名人です、其頃は天藩に出て

居りました、さて私が故郷の播磨へ行つて歸つて來るとすぐ傳旁町で三光齋の太閤記を弾くことになりイヨ／＼開場といふ前になりましたが、丁度長門大夫を弾いて居りました清七といふ人が病氣になつて勤める事が出来ません、尤も其弟子も多勢ありましたが長門大夫は圓平が好いといふので、私を招に來ました、私も長門さんなら弾いて見たいと思ひましたから無理と知りつゝ掛持をしました、處が清七は長門さんばかりでない長尾大夫のも弾いて居つたのですから私も長門さん許りで免して貰ふと云ふ譯になりません、都合三人の三味線を弾く譯で、天藩の方は佐倉宗吾でした、イヤ苦しいのなのでお話になりません、デ駕籠なら駕籠、船なら船で駆けつける其途中で上下なんぞの支度をするのです、尤も遅れる様な事があれば今の廣助さん其頃常助と云ましたが間を繋いでくれました、實に長門さんには大層引立てられました其代り死ぬるまで私が弾きました、夫から染大夫、春大夫を弾きまして今日になりましたが、今では別に教へて貰ふふものもなく、左ればと云つて此藝といふものは行止り是が底だ此上はないと云ふ事はありません、けれども教はる人がありますから、止むを得ず弟子を師匠にして居るのです、弟子を師匠といふのは可笑しいやうですがなに弟子でも聞き役に依つてはそりや師匠になりますよ、此の音色といふものは氣合一つのものですから幾千拙いものでも千一つ氣合の加減で何とも云へない眞正の音を出すことがあります、それを師匠にするのですな、又一向の小兒が無邪氣に弾くのが是も師匠になりますイザ撥を取つて三味線に向ふ上は無邪氣即ち思ひ邪なしといふのが一番趣意ですな、弾きながらア、金が欲しいとか、イヤ機嫌に美女が居るとか、土間に知己のものが聞いているなど、思つて彈様ではもうダメです、音色に精神といふものがなくつて到底拔段でガラン洞ですから幾

干派手に弾いてもものになりません、何でも三味線に弾まつた以上は無念無想眼中人なく聞て貰ふといふ氣もなければ一つ賞められて見たい等の野心もなく只世の中に三味線と撥ばかりといふ觀念で臍の下へ身體に有りつた力の力をこめテンと打付けるのです、此のテンと云つたが最期幾干拍からうがまう取返しが付ません、遣り直したら好いでせうが夫は遣直しの音色で先の音色は矢張り先の音色です、一生に一通しかない音色です、詰り武士が眞剣勝負をすると同じ事ですな、竹刀で遣るのならチャン／＼ペラ／＼で遣つても好うございしますが、眞剣で一つ誤つたら參つたと云た所が追付きません、當がコロリと落るか、手が一本なくなるかするのですから、此の心得で遣り損なつたら取返しが付かんといふ腹で弾かなければいけませんね、又是に情といふことも入りますな、情といふものは早い響へが安達原なら貞任は何ういふ人、宗任は勇しいもの袖袷は何様性質のものといふ事を腹に入れてその情を音色に顯はすのです、又一口に道行と云ひますと無雜作に思ふ方がありますが、中々是が六ヶ敷いので恐らく當時では道行を語るにも弾くにも眞正の事を遣る人はありますまい、是に就て斯いふ語がありますよ、私の師匠は三代目豊澤廣助が私を元親大夫からなつた染大夫俗に金谷染大夫といふ人の相手で朝顔日記を弾いて居りましたのを先代の廣助即ち二代目ですな、其頃京都に居りましたが此人が聞てくれなす、下手ながら見處をつけたものは是は廣助を繼ぎ様と思ひ定めたそうで、尤も前お話ししました通り私が廣助になります管で、既に師匠の死くなります時に應祇に圓平に名を繼がせる萬事京都の師匠（即ち二代目廣助）に願へと遺言迄された位でしたから無論私が廣助になる所でしたが藝人社會に得て有勝ちのゴダ／＼が起りました一時お上沙汰、其頃は奉行所でしたな、其所へ願出づるなどといふ騒ぎになりましたので、私が師匠の名前ですから繼ぎたかつたけれども、ナニもお上沙汰にしてまで繼がなくなるとも好い殊に時の奉行でした

高橋丹後守様も私を御最負で御注意を頂きましたから私は圓平で通さうと決心をしました、そういふ譯ですから京都の大師匠（二代目廣助）が殊の外私を可愛がつてくれましたして是非とも廣助にして遣りたいとて元祖の廣助さんの後家御の所へつれて行つてくれた事もありました、夫で時々京都へ遊びに來いと云ひますから、此の人に就いたら味い事を聞くことが出来るだらうと時々遊びに參りましたが、或る時貴様は道行を知つてゐるから知てるならば千本櫻の道行を弾いて見るといひますから、私の腹では其頃染大夫や春大夫を弾いて居りましたで少し天狗で居る時ですから宜しいといふんで弾きますと、未だまづも終らないのにオヤ貴様は未だ道行を知らねへな、もう止めると云ひますので、ナア＝知らない事はありませんまア聞いて下さいと又彈きに掛りますと、ソリヤ知つてゐだらう、ダガ貴様の知つてゐるのは訓練三味線といふのだ、お武家方が訓練をするのは戦争の稽古をするので、訓練ばかり違者に遣つても、スワ戦争といふ時に役に立たねば何にもならん、貴様の訓練ばかり違者まので、眞剣の戦争といふ腹がないからまだダメだもう止しろと云はれました、少しむかつきましたけれども考へて見ると味はひの有りさうな話ですから是には何か秘訣があるのであらうといろいろ工夫をしましたが皆判りません、是は何うか聞出したいものだ、と其後時々參りましたが中々教へてくれません、尤も此師匠は平常至つて眞面目な人で餘り口數を利きませんが、少しお酒が遣入りますと面白くなつて頻りに大平樂を並べる癖がありますから是は一番論ぢやないが酒で殺して本音を聞かうと考へまして或時祇園の料理屋へ呑に參りました時頻と強ひ付けて御機嫌になつた折を窺ひ持出しました、スルト此の計略が見事圓星に當りました。

（以下次號）